

詩人石原吉郎の俳句観

・定型は彼を救った・

石川夏山

一 はじめに

石原吉郎は大正四年、静岡県土肥村に生まれ、昭和五二年、埼玉県上福岡市で亡くなった(六二歳)。第一詩集『サンチヨ・パンサの帰郷』でH氏賞を受賞、「水準原点」「北條」などの詩集により、戦後の現代詩を代表する詩人であった。同時に『望郷と海』『海を流れる河』などの評論・エッセイでも知られるとともに、句集『石原吉郎句集』、歌集『北鎌倉』を著した。その文学的営為には八年間に渡る壮絶なシベリア抑留体験が強く影響していた。

彼の俳句及び俳句観は斎藤慎爾による句集の出版がなければ、詩人の文学修行の一頁としてしか語られなかっただろう。斎藤は主宰していた深夜叢書社で昭和四九年に『石原吉郎句集・附俳句評論』を刊行した(注1)。掲載は昭和三年から三七年にかけて雲俳句会の『雲』に発表されたもので、俳号は石原青磁、石原せいじを用いている。

斎藤は昭和三四年、二〇歳で秋元不死男主宰『氷海』の氷海賞を受賞した翌年から二十年間句作から遠ざかった。その間の昭和四九年に、吉郎の十二年前の句と俳論を出版するというのは、かなりの共感や意図があったのではないか。斎藤は吉郎が捕虜としてシベリアに抑留されていた昭和二年、京城府(ソウル市)から山形県飛鳥へ移住している。

吉郎について俳句界での言及は多くはないが、現代俳句協会のホームページ「読む・学ぶ」の「現代俳句コラム」では、高岡修氏が吉郎の句「縊死にせよ絞殺にせよ水温む」を取り上げ、「石原は、詩と俳句を同じ思想のレベルで書きえた数少ない詩人のひとりでもあった」と紹介している(注2)。

また、文芸評論家で俳人の井口時男氏は氏のブログのタイトル『批評と俳句…井口時男の方丈の入室』の下に「いわれなき註解となって／きみは／そこへ佇つな(石原吉郎)」という吉郎の詩の一節(注3)を掲げている。そして、数回にわたり吉郎について言及している(注4)。

本論は詩人石原吉郎の俳句論、とくに定型論を中心に、俳句と彼の実存について論じる。

二 石原吉郎と文学

(一) 石原吉郎の文学的土壌

吉郎は幼児期に母を亡くした。自筆年譜では「東北農家出

の継母に育てられる。父は転職の関係で、東京、福島、新潟などを転々し、大正一五年、東京府下におちつく。爾後七年ほど半失業状態づく」という幼少年期を送り、東京高等師範学校の受験に失敗した年には自殺未遂を起こした。翌年も師範は失敗したが、東京外国語学校ドイツ部に入った。河上肇やマルクス主義文献を読み、北条民雄に衝撃を受け、シェフトフ、ドストエフスキイ、さらにはカール・バルトを読んでキリスト教の洗礼を受けた。詩も作った。二四歳のとき、仕事をやめ、神学校に入るために上京するも召集を受け、軍に入った。ロシア語を習得させられ、満州軍でロシア語の情報蒐集、翻訳の仕事に就いた。敗戦後の昭和二〇年一二月、ソ連軍の捕虜となり、二四年四月、重労働二五年の刑を受け、極寒の地で、粗末な食事、ぶつかり合って寝るような狭い寝床で、重労働を強いられた。食をはじめ、囚人同士で競争をし、せざるをえない協調もした。囚人服を着て、作業の行き帰りの隊列からはずれるだけでも銃殺されるかもしれない監視下の、ロシア語の世界で、ペンや紙を持つことを許されず、日本語に飢え、失語の恐怖にあった。そのような状況下、自殺したり、狂った者もいた。そこで、彼は俳句を作り、記憶していた。

昭和二五年には栄養失調で入院二回の末、九月にハバロフスクへ昏睡状態で運ばれた。当地でしだいに体力を回復し、作業も軽作業となり、ペンと紙も持つことも許された。そして、昭和二八年、スターリン死去による特赦で、一二月一日、舞鶴港に入港した。

しかし、八年の時を経て日本に戻ると、日本の体制も社会も人々の心情も一変し、御苦労様どころか共産主義者になったのではないかと疑われて警戒、差別され、両親は亡くなったのではないかと親族と断絶し、就職もままならなかった。帰国後もバルトの『ロマ書』を読んでいたが、キリスト教にも、共産主義にも、戦後社会にも染まることができず、単独者として生きるしかなかった。彼の悲惨な体験は深く記憶のなかに積み重なり、結婚し、詩人とみなされるようになってからもフラッシュバックして彼を苦しめたのではないか。

(二) 石原吉郎の文学

昭和四三年一二月に出版した処女詩集『サンチヨ・パンサの帰郷』は詩壇に衝撃を与え、翌年、H氏賞を受賞した。ドン・キホーテどころかサンチヨ・パンサだという自己卑下の題で、シベリア帰りの四九歳は驚きを持って詩壇に迎えられた。冒頭の詩「位置」。

しずかな肩には／声だけがならぶのではない／
声よりも近く／敵がならぶのだ／
勇敢な男たちが目指す位置は／

その右でも おそらく／そのひだりでもない／
無防備の空がついに撓み／正午の弓となる位置で／
君は呼吸し／かつ挨拶せよ／
君の位置からの それが／最もすぐれた姿勢である
(注5)

石原吉郎は多くの詩集を出し、日本現代詩人会の会長も務めた(昭和五〇〜五一年)が、その詩は難解で、吉郎の名前は詩の愛好者のなかにとどまっていた。しかし、『望郷と海』をはじめとするシベリア抑留について書いた評論集を刊行すると、彼は一気に世間に知られるシベリア帰りの文学者になり、エッセイやインタビューなども依頼されるようになった。また、評論集のなかにはアフォリズムもある。野村喜和夫は、吉郎のアフォリズムは「朔太郎以来の収獲といっても過言ではない」と書いている(注6)。

耐えるとは、△なにかあるもの▽に耐えることではない。
△なにもないこと▽に耐えることだ。(注7)
位置の確認とはまったくの測量である。それはまちがいはなく△技術▽である。(注8)

死の前年には歌集も作った。吉郎はさまざまな文学形式で、その区別と関連を意識し、使い分けながら、個性的な作品を遺した。

三 石原吉郎の俳句と俳句観

吉郎は『石原吉郎句集』の「あとがき」に次のように記している。

句集が出ることになろうとは思ってもいなかったの、いささかとまどいの感なきをえない。詩作に先立つ数年間、俳句に熱中した時期があつて、それなりに詩作のための、いわばトレーニングのごとき役割を果たした。詩を書くようになり、俳句からはまったく遠ざかっていたが、たまたまある結社へ誘われたのを機に、三年ほどのあいだ俳句にまぎれこんだ。これはその時期の心許ない所産である。シベリア時代のハバロフスクで、体力の回復後、ペンと紙も許され、軽作業、靴工、左官として働いていた際、ハバロフスクの日本人たちの「韃靼句会」に参加した。郷原宏は次のように記している(注9)。

石原吉郎は詩人である前に俳人だった。学生時代にはモダニズム風の詩を書き、シベリアでも何篇かの詩を脳裏に刻んで持ち帰ったが、それはあくまで習作ないしは草稿といふべきもので、自分なりの方法論に基づいて意識的に作品をつくったのは、ハバロフスク収容所時代の韃靼句会をもって嚆矢とする。

帰国後、文芸投稿誌に詩を投稿し、その仲間ですの会を作ったが、昭和三年、収容所仲間の斎藤有思に誘われて、韃靼俳句会の主宰だった佐々木有風が始めた雲俳句会に参加した。同人はシベリアからの帰還者が多かった。後述するが、ここでの句作や俳句への考察が詩人石原吉郎を作ったと言って過言ではない。この時代の句と俳論が掲載された『石原吉郎句集』と詩人中桐雅夫との対談（注10）を中心に彼の俳句観を整理する。

（一）定型

『石原吉郎句集』の「定型」についての覚書」の冒頭は以下のとおりである。

「われわれが短歌の条件として認めるのも、また定型以外のなものでもない」と一人の歌人が語った。この言葉をそのまま受け入れうるような条件と雰囲気の間には、俳句作家はさらにはげしい口調で、まったくおなじ言葉をくりかえさなければならぬだろう。「定型がすべてである」と。僕もそれに同意するものである。／

「定型が一切である」というところから俳句を書き始めてはならない。しかし、すべての俳句はさいごには、そこにたどりつく。／

誤解を避けるにいうなら、俳句は結局は「かたわな」舌たらずの詩である。ということは、完全性に対する止みがたい希求と情熱が、俳句を成立させる理由と条件になっており、その発想法の根拠となっていることを意味する。

定型は詩との最大の差異であり、俳句を俳句たらしめるものだ。吉郎は「自由」な現代詩は、このようなパラドクシカルな苦悩と情熱を知りもしないだろう」と言う。さらに、「覚書」は高柳重信の言葉を紹介する。

「詩学」の八月号で、高柳重信は詩人の側からの批評に對して、「みずから、翼を折り、両眼を突く態の、そんな生き方、死に方も嘗ってはあつた。それぞれの生き方死に方に対する、何故か、の問いは、それぞれに、現に切実に生きている者だけが発すべきなのだ」とこたえている。

本論に掲載する吉郎の多くの句は定型で作られている。しかし、例外もある。

林檎の切口かがやき彼はかならず死ぬ

「犬ワハダシダ」もはや嘘をつくまでもない

（二）季語

季語について、吉郎は中桐雅夫との対談で「ぼくはときどき季語を抜いておりますけれども、やっぱり季語は要ると思います。」と述べている。しかし、続けて、シベリアで俳句を作る場合は日本の季語が通用しない、無理があると述べている。ほとんどの句に季語はあるが、無季もある。

(二)句めは『雲』発表時(注11)は四(二)のように季語があった。)。

庶民銀行扉口より種子こぼれつぐ
肩がある憎しみとほす肩のうえに

(三) 表現

俳句に英語を用いたり、ルビや記号を用いたりする場合がある。

黙秘権もちうたふ「海^{ラ・メール}よ」肩から夏

縊死者へ撓む子午線 南風^{はえ}の air pocket

△河は呼んでる▽党员五月の査問会

定型、季語、表現において、挑戦的な句を紹介したが、新しい俳句に挑戦する会員を擁護して、『雲』で「作品評について」と言う文を寄せている。はじめに、ある会員の他者への評言で「とくに憤慨に耐えないのは、この人たちが「俳句はこういうものでなければならぬ」とか「こういう言葉を使つてはならない」といった一定の禁止的態度をもって臨んでいることです」とし、「俳句の前近代性と職人性からまがりなりにも脱出を「試みて」いる少数の事例に対しては、好むと好まないとにかかわらず、まじめな評価をもって臨むことが必要です。不完全な言葉を越えて、なお詩精神が持つ結実の可能性を見のがしてはなりません。」としている。(注12)

(四) 俳句の物語性と切断性

吉郎の詠む対象は自分という存在や人間や人間界だ。吉郎は句集の「俳句と△ものがたり▽について」で、一枚の外国映画のスチール写真からは多くのことが想像され、無数の物語をもつと言い、写真は長い物語を一点で切断した断面のようなものだという。そして、「俳句は他のジャンルに比べて、はるかに強い切断力を持っており、その切断の速さによって、一つの場面をあらゆる限定から解放する。すなわち想像の自由、物語への期待を与えるのである」と記している。そして、俳句は「二つの場面の間にある一つの裂目をとらえなければならぬ。でなければ俳句における時間性が回復される時はないであろう」という。吉郎はこの部分の説明として加藤郁平の句を出している。

雨季来りなむ斧一振りの再会

という加藤郁平の句は、いかなる場面の再現でもない。

しかし、それが単的に一つの裂目をとらえているという点で、一つの完璧な物語をもっていると僕は考える。

前項の吉郎の句を見て欲しい。「黙秘権」「縊死者」「査問会」など、シベリア時代を想起させる事柄からの切断である。

さらに、鋭い切断の句。

銃声のごとし秋立つ日の邂逅であひ

柿の木の下へ正午を射ちおろす

(五) 俳句の発想の広さ

吉郎の中桐雅夫との対談での発言。

ぼくの初期の詩は、俳句的だとさかんに言われたんですよ。俳句の表現形式をそのまま使ったんだな。俳句の空間の広さというものを、僕は詩にそのまま使ったような気がするんです。残した空間の広さっていうのは、やっぱりあるんですよ。実在するんですよ。

次の句は発想が広いと言えるだろうか。

懐手蹠ありといつてみよ

無花果や使徒が旅立つひとりづつ

中桐の、二十行書いたからおしまいという詩が多くなつたという発言に対し「空間がまるっきりない。空間がない

ということとは、つまり罅エロが伝わっていく、余韻が響いていく空間がないということでしょう」と述べた。

(六) 俳句の発想の重さ

中桐雅夫が、自分が詩に書けなかった経験と同じような経験が、ある俳句で表現されていたという話をしたことに対して、吉郎は「発想の重さというものは、詩よりも重いですからね、俳句のほうが。発想が重すぎて展開出来ないわけです。ただ、場合によっては、発想だけでどうしても処理出来ない俳句があるだろうとぼくは思いますね。短歌ではそれほど発想は強くないですよ。」と言う。さらに、その後、高屋窓秋の全句集に解説を依頼され、「降る雪が川の中にもふり昏れぬ」の一句に絞って書いたら、窓秋から人と違う読み方をしてくれた、と丁寧な手紙をもらったと話している。次の句の重さはどうか。

百一人目の加入者受取る拳銃コルトと夏

(七) 「社会性俳句」について

薔薇売る自由血を売る自由肩しの肉

句集の自句自解は「社会性俳句（こんなずさんなレットルが通用するのも俳句の世界なればこそだが）を気どったつもりではない。僕が目ざしたのは、自由というイメージが血と薔薇とに同時に結びつくという状況に対するきわめて感性的な反撥である」とある。

中桐との対談でも「社会性俳句という分類の仕方そのものがおかしいですよ。」と述べている。吉郎にとって、社会的な問題へ関心をもつてテーマとすることは自明なことだということだろうか。

(八)「前衛俳句」について

中桐との対談で「いまの若い人が前衛俳句にとりつきやすいのを、塚本邦雄は歎いてるわけですよ。塚本邦雄の前衛短歌には、ある意味での華麗なメロディがあるでしょう。ところが前衛俳句はそれを壊してるといふんですよ」「でも、それを壊すのは非常に苦痛だろう。その苦痛をおかしてまで壊すという気持は尊敬出来るとは言ってましたね。」と言う。これは、塚本発言を引用しながら現代俳句への共感を表明していると思われる。

佐佐木幸綱は次のように書いている。

● ●
石原吉郎は現代俳句に関して深い関心と理解を持っていたようである。伝統と形式、これが俳句を支える二本の柱だとすると、石原は後者に焦点を絞って俳句をとらえており、このとらえ方は、前衛俳句とも呼称される現代俳句の作家たちのそれとほとんど重なり合う。(注13)
彼は初期の三鬼や草田男が好きで、俳論では重信や郁乎を引用した。中桐の若い俳人は出ているかという問いに対し、深夜叢書から出た津沢マサ子の句集は好きだと言った。

(九)「第二芸術論」について

桑原武夫の「第二芸術論」については、中桐雅夫との対談で次のように述べる。

「第二芸術、それも結構じゃないか」という言い方をされると、そんなとぼけた言い方はない、堂々と主張しろ、といたくなる。俳句も一流の文学だからと言えば言えるんですけどね。

中桐の「俳句の国民的性格ね、だれもかれもがみんな書く。したがって芸術じゃないというわけですよ。強いて芸術という言葉を使うとするならば、第二芸術として区別したほうがいいんじゃないかという意見だった」の発言に対して、吉郎は「第一がよくて、第二がその下という言い方じゃなしにね」、区別するだけならいい、と言っている。

(一〇)句会、結社について

中桐雅夫との対談で述べている。
俳句の結社に入っていやなこと、すぐ天狗が出来て、序列が出来ちゃうことね。出来た序列はなかなか替えられない。／

ぼくは運座そのものの形式がどうも疑問でしようがない。それが俳句をやめた理由の一つでもあるんです。

吉郎の句の俳句主体の非日常性、重さ、想像の拡げ方、二物衝撃の不自然なつなげ方についていけない、理解できないと思う人はいただろう。(三)の「縊死者」の句については句集の自句自解で、「air pocket」と特に横書きにしたのは、エヤー・ポケットというかな書きのムードをきらったためと、それから特にこういう横文字を嫌う人を考慮したうえで、ささやかないやがらせです」と書いている。郷原は「俳句という形式に安住し自足する人々に対する、石原の嫌悪と苛立ちの表現にほかならない。」と書いている(注9)。

吉郎は、二、三人を除いて自分の句が理解されず、教条的な俳句論や人間関係などに嫌気が差し、俳句から離れていった。

(一一) 俳句における賭け

詩であれ俳句であれ、作品の完成は、作品を手放すことであり、選択や修正を断念することだ。別の視点から言えば賭けることだ。そのような切迫感を持った決断によって、作品は作者から離脱し、完成となる。吉郎は句集の

「賭けとPoésie」において、「詩にだって命を賭けることができるんだ!」とか、「その時、何ものかによって逆に自身が詩作されているのだ」ということによって何かが生まれてこないかと言う。吉郎は賭けのような切迫感、断念の気持ちをもって句を作っているか、と言いたいのだろうか。

四 石原吉郎の実存と俳句

(一) 吉郎の実存と定型

定型は三度、彼を救った。

一度めはシベリア時代。極寒、飢え、重労働、失語状態、監禁という絶望的な状況のなかで、彼を救ったのは俳句という定型だった。食べるのも寝るのもやつの、選択することの全くない悲惨な状況でも、頭のなかで言葉は選択できる。ペンと紙がなくても、定型ならリズムで記憶でき、自分を表現できる。自己の存在に関心をもち自己のあり方を考える主体的な存在を「実存」と言うならば、自分の言葉で自己を表現することは実存を生きる証しだ。実存(注14)を支え、自己同一性(アイデンティティ)を保持するため、言葉の連なりを定型で表現した。定型のリズムは繰り返し口ずさみ、脳に染み込んだ。定型は生きる自己の証しそのものだった。

清水昶は鮎川信夫、谷川俊太郎との対談で次のように述べている。(注15)

石原さんがどこかで言っているんですけど、言葉というのは他人とつながるためではなくて、自分をとのえ

るためだつて、そういうことを言ってるんです。でも、ぼくは、石原さんの他者というのは自分自身のなかにあつて、他人の区別はなかつたんじゃないかと思ひますね。

『石原吉郎句集』には補遺として、シベリア時代の句が四句ある。

ペンも紙も持てずに記憶していたカラガンダ時代の二句。

葱は佳しちちはは愁ふことなかれ

宥^{なだ}めえぬ怒りやつひに夏日墜つ

ハバロフスク時代の二句。

囚徒われライラックより十歩隔つ

けさ開く芥あり確^{しむ}と見て通る

二度めは雲俳句会の三年間だ。吉郎は詩作の停滞のなかで俳句の沼にどっぷり浸かり、句作し、俳句について考えた。そこで、重いテーマ、物語性と切断性、広がりなどを意識しながら、暗喩やイメージの展開、二物衝撃など実践的な俳句を作った。その時期は、「帰つて、もうだいたいぶん時間がたつて、だいぶ詩を書き出して、俳句を書くようになったときにぶつかつたのが塚本邦雄の短歌なんです。塚本邦雄の影響で書いたような句がいっぱいありますよ。」と中桐に語っている(注10)。

倉橋健一は吉郎の「俳句は結局は「かたわな」舌足らずの詩である。」という「定型についての覚書」の文を引用した上で、「納得」という詩について、「この詩は全体を二行ないし三行に解体することが可能で、そうすれば水面下に

隠れているかたわな舌足らずが浮かびあがるはずであり、

そこを往路とすれば、一篇の詩としての合成が環路となるはずである。／石原吉郎にとつて俳句の体験は、シベリア体験にまさるともおとらないかけがえのない大きなものだったろう。詩法を獲得するための詩法そのものの喩の役割としても。」(注16)と述べている。定型が彼の詩法を整え、「トレーニング」して、吉郎を詩人石原吉郎にした。「二(九)第二芸術論」における「俳句は一流の文学だ」とは吉郎の俳句界へのエールだろう。そうでなければ、自分の詩も文学ではなくなるのだから。

三度めは、死の前年の短歌だ。彼はシベリア抑留についてエッセイを書いたが、具体的に、理解されるように、伝達性を意識して書いた。散文は彼の過去をえぐり、傷を追体験させ、精神に悪影響を与えた。エッセイを書き出してからの吉郎のアルコール依存による心身の壊れ方は、粕谷

栄市（注17）、小柳玲子（注18）などが書いている。最期は自宅で入浴中に急性心不全で死去、翌日発見された。吉郎は死ぬ前年の一二月、出勤途中の新橋駅で倒れて三日入院した際に短歌を作った。中桐雅夫との対談で語っている。

去年、急性のアルコール中毒で病院に入って、書こうと思ったら、もちろん詩は書けない。散文も書けない。斎藤茂吉さんの息子さん（斎藤茂太氏）の病院に入ったんですが、あの人は短歌のわかる人ですからね。とにかく無気力な状態から抜け出そうと思って、夢中になって三日間に二十五首書きました。全部短歌なんですよ。なぜあああいうときに短歌が書けるかと考えたら、形があるからなんです。

五七五に七七がついていることで展開ができる。切断や賭けというエネルギーは俳句ほど使わない。短歌という定型によって無気力状態から一時的には抜け出ることができた。

歌集『北鎌倉』の標題紙裏の歌。

こんじやう みなも
今生の水面を垂りて相逢はず藤は他界を逆向きて立つ

（注19）

同年、『詩の世界』に詩三篇、俳句三句、歌二首を寄せている（注20）。入院前に作った作品と思われるが、物語性や重さ、緊張感は感じられない。抜け殻になっていたのだ。

（二）定型と位置と断念と

定型は吉郎を三度救ったが、二度めは詩人としての停滞を救い、飛躍させた。定型を作り考えるなかで多くの技法を獲得したが、人生と文学のキーワードとしての「位置」と「断念」の獲得も非常に重要だった。

私にあって、位置とはまさに断念する地点であり、その姿勢はいまでも私に持続しているといわざるをえない。

（注21）

私の詩が発したときには、「位置」という発想が唐突にあって、その発想が私の詩にとって次第に決定的になって行った、その延長線の上へ断念という発想が浮びあがって来たように私自身には思われます。／私が「位置」ということばについて考えるのは、自分自身がそこにいるよりほかどうしようもないという位置であって、多分それは私自身、軍隊とシベリアに拘禁されつづけて来た体験がその背後にあると思います。／つまり自分はそこにいるよりほか、どうしようもなかったという、その位置です。（注22）

位置」はシベリアの、逃げることでできない、重労働のためにのみ生かされた位置であり、帰国後も、いつでも何度でもそこに戻されてしまう記憶の場所だ。位置は「北」「北方」でもある。「位置」は二(二)で掲出した「位置」という詩があり、詩集『禮節』の詩「音楽」の一節には「あからんで行くことで／りんごの位置をただしくきめるのは／音楽だ」がある(注23)。次は、詩集『水準原点』の詩「水準原点」。

みなもとにあつて 水は／

まさにそのかたちに集約する／

そのかたちにあつて／

まさに物質をただすために／水であるすべてを／

その位置へ集約するまぎれもない 高さで そこが／

あるならば／みなもとはふたたび／

北へ求めねばならぬ／ 北方水準原点 (注24)

「肩」は「位置」の派生だ。二(二)の詩「位置」の冒頭は「しずかな肩には」であり、三(二)の掲句は「肩がある憎しみとほす肩のうへに」だ。この句は、雲俳句会昭和三四年十月例会への投句は「綿がある憎しみとほす秋の肩に」(注11)だった。季語をやめ、理解されにくいのを承知の上で「肩」へ変更した。「肩」を使いたかったのだ。「位置」はアフォリズムにも歌にもある。

私は告発しない。ただ自分へ位置Vに立つ。(注7)

遠景はとほぎにありて北を呼ぶ 北よりとほぎ北ありやさ
らに (注19)

俳句においては「位置」という言葉を入れた句はない。

作句主体の視点が位置だ。

ジャムのごと背に夕焼けをなすらるる

懲罰を待つや冬帽傾けて

次は、位置に対して断念ができているか、自分の姿勢を整えられているかという句。

冬木立はじめにあれが敵となる

われおもふゆえ十字架と葱坊主

逆吊りに売らるる鮫鱈カミュ氏死す

「位置」と「断念」は不可分だ。彼はシベリア抑留で染みついたそれから逃げることなく、それをモチーフに「定型」によって詩を鍛えて行った。エッセイ集『断念の海から』に「狂気と断念」という文がある。

断念こそは生きることの基本的な姿勢であったのではないか。いわば狂気からの離脱こそが、私にとって生きることのはじまりであったとわかっていい。∴／私にあって、位置とはまさに断念する地点であり、断念する姿勢であり、その姿勢はいまも私に持続しているといわざるをえない。(注21)

詩集『禮節』のはじめの詩「断念」。

この日 馬は / 蹄鉄を終る /

あるいは蹄鉄が馬を。 / 馬がさらに馬であり /

蹄鉄が / もはや蹄鉄であるために /

瞬間を断念において / 手なづけるために /

馬は脚をあげる / 蹄鉄は砂上にのこる (注23)

五 結語

吉郎は三度、定型に救われた。彼の文学は生と文学の根源的な関係を示している。AIの出現と活用によって、人間の、人としての価値が揺らぐように見える現在、人はなぜ生きるのか、生きられるのか、そこで果たす文学の役割ということを考えるために、石原吉郎の文学と定型論は重要ではないだろうか。

二〇二四年は『石原吉郎句集』が出版されて五十年、出版をした齋藤慎爾は昨年亡くなった。吉郎の俳句や俳論は現代において、なお、吟味する意義があるのではないか。

〔注〕

* 出版年は西暦で記す。

注1 『石原吉郎句集』 深夜叢書社 一九七四年

(奥付の発行者は「斎藤慎爾」) * 掲句はすべて本書で、『石原吉郎全集』第三巻に収載。

注2 現代俳句協会ホームページ 「読む・学ぶ」内「現代俳句コラム」二〇二二年五月一日

注3 『石原吉郎全集』第一巻 花神社 一九八〇年 「斧の思想」内「月が沈む」

注4 ブログ『批評と俳句』井口時男の方丈の一室』二〇一二年四月

注5 『石原吉郎全集』第一巻 花神社 一九八〇年 「サンチョ・パンサの婦郷」(「サンチョ・パンサの婦郷」思潮社 一九六三年)

注6 『証言と抒情——詩人石原吉郎と私たち』 野村喜和夫著 白水社 二〇一五年

注7 『石原吉郎全集』第二巻 花神社 一九八〇年 「日常への強制」(『日常への強制』構造社一九七〇年)

注8 『石原吉郎全集』第二巻 花神社 一九八〇年 「海を流れる河」(『海を流れる河』花神社一九七四年)

注9 『岸辺のない海 石原吉郎ノート』 郷原宏著 未来社 二〇一九年

注10 『石原吉郎全集』第三巻 花神社 一九八〇年 「一期一会の海」内「俳句と青春」中桐雅夫との対談(『一期一会の海』日本基督教団出版局一九七八年)

注11 『雲』昭和三五年一月号 雲俳句社 一九六〇年

注12 『石原吉郎全集』第三巻 「作品評について」* 『石原吉郎句集』には収載なし。

注13 『石原吉郎・現代詩読本2』 思潮社 一九七八年 「物語の可能性と沈黙の詩・石原吉郎の俳句と短歌」佐佐木幸綱著

- 注 14 『石原吉郎全集』第二卷「日常への強制」に実存に
ついでの記事がある。
- 注 15 『石原吉郎・現代詩読本2』 思潮社 一九七八年
「詩の象徴性と生存感覚・断念Vと^拒絶Vの構造」
対談・鮎川信夫、谷川俊太郎、清水昶
- 注 16 『現代詩手帖』 四〇巻三号 思潮社 一九九七年
「石原吉郎と俳句定型」 倉橋健一著
- 注 17 『現代詩手帖』二〇一五年一月号 思潮社 二〇一
五年 「ロシナンテ」以後の生きざま」 粕谷栄
市著
- 注 18 『サンチョ・パンサの行方——私の愛した詩人たちの
思い出』 小柳玲子著 詩学社 二〇〇四年
- 注 19 『石原吉郎全集』第三卷 花神社 一九八〇年
「北鎌倉」(『北鎌倉』花神社 一九七八年)
- 注 20 『詩の世界』第5号 詩の世界社 一九七六年
* 歌は『北鎌倉』に収載。詩、句は全集にも収載なし。
- 注 21 『石原吉郎全集』第二卷 花神社 一九八〇年 「断
念の海から」(『断念の海から』日本基督教団出版局一
九七六年)
- 注 22 『石原吉郎全集』第二卷 花神社 一九八〇年 「一
期一会の海」内「断念と詩」(『一期一会の海』日本基
督教団出版局一九七八年)
- 注 23 『石原吉郎全集』第一卷 花神社 一九八〇年 句集
「禮節」(『禮節』サンリオ出版 一九七四年)
- 注 24 『石原吉郎全集』第一卷 花神社 一九八〇年 句集
「水準原点」(『水準原点』サンリオ出版一九七二年)